**世阿弥研究会18年4月28日(土)　講読範囲の内容の要旨の報告**

目次

一、「知二習道一事」(習道を知ること)の続き「208頁16行目～210頁5行目」 1頁

二、「上手之知レ感事」(上手の感を知ること)「210頁15行目～212頁11行目」 1～2頁

三、感想および考察と次回の予定 2頁

参考文献 3頁

**一、****「知二習道一事」(習道を知ること)の続き「208頁16行目～210頁5行目」**

ここでは、その道の第一人者となっていくためにはどういうことが必要であるのかという前回までの話しを受けてさらに論を展開し、当今の年若な役者のやり方を比較して観察をした時に略式になっているということが語られています。

すなわちしっかりと技を練習せずにうわべの模倣ばかりをするから、こんな弊に陥るのだということです。そして、まず二曲から三体の段階に入り、それを長年のあいだ修行し、順序を追って休みなく練習の功を積むならばどんな芸でも自分の得意となり、行くとして可ならざるなき芸風となるはずであるのにただ見まねで、その場だけの演技をするものだから略式になるのだとあります。

そのために二曲を習うあいだは、三体すなわち劇的演技の世界を学んではならず、三体を学習する時期になっても軍体はしばらく習わないようにして、軍体を習うようになっても砕動風や力動風は後まわしにしなければならない期間があるということでした。

段階的に順序を踏んで一つ一つ技を練習せよということが説かれているのでありこれらを一度に習い一度に身につけるということはできないということであって、年若な役者が腕達者にやっていくと一時的な花の生まれることもあるかもしれないが、年がよれば芸が下がっていき、仮に芸が下らないでも名人になることは絶対にありえないので注意を必要とするということがあります。

なお「略式」について注意しておかなければいけないことは、あまりに新奇な能ばかりを好んで、従来の能は手がけたがらずにいると、自分のものになった能を持たないでいることになり、それも能の「略式」となるので手に入りきった得意の能を看板の演目に定めておいて、その中へ新しい能を交えてゆくようにしなければならないということが語られてあります。

その上で、珍しいものばかりをしていると、その珍しさがあたりまえになって、珍しさを失うことになるので、旧い能の中に新しい能を交えて演ずるようにしていくと旧い能も新しい能も両方とも新しく感じられてそれこそが「真の花」であり、目指すべきところだとあります。

また孔子の言葉を引用し「古いことを研究して新しいことを知るのは、すなわち師匠というものだ」とまとめています。

**二、****「上手之知レ 感事」(上手の感を知ること)「210頁15行目～212頁11行目」**

ここでは「音曲・舞・働き」すなわち「謡・舞・動作」がちゃんとできれば上手というのであるけれども、そもそも上手というものはまた別にあるのであって、たとえば、声も良く舞いやはたらきも十分でありながら名人にはなれない役者がいるが、声も悪く二曲もそれ程の達人ではないのに世間から上手だと認められるものもあるということが語られています。

その理由というのは舞いや動作は技だしその技を支配するのは心であって能に悟りをひらいた位だからであるからであり、能のおもしろさがどうして生まれるかを把握して、その心でする能は技の方面はあまり達人でなくとも名手と認められるとあります。

そのために真の名手だと認められることは舞いや動作の練磨だけによるものではなく、役者の悟りともいうべき心によるものであって、優れた芸力から生まれる感だと思われる、とあります。

この道理をよく理解する者は上手の資格があり、技を十分に習得した役者でも興趣のない者もあり、初心の時から興趣のある者もあるということが語られてあります。

だから、初心の段階から、七八分、十分と芸が進歩してゆくにつれてだんだんと名手の芸境に至るものであるが、みごとだという感が出せるかどうかは技の進歩とは関係なく、興趣がある以上に、思わず「あっ」と感嘆するほかない段階もあり、これが感であるとあります。

感というのは、思わず知らずの境地であり、おもしろいとさえ意識されない感動で、『易経』では「感」という文字の下の心を書かないで「咸」(かん)とよませており、真の「感」というものは、こころのはたらきを超えた境地であるのだということが示されています。

最後では、役者の芸境は初心から休みなく研修の階段をのぼってゆけば、「立派な役者」というまでには至りうるのであって、これは「上手の芸境」にいたったものであるのだが、上手の芸境のうえに、もうひとつ、興趣ふかく思わせるところがあれば、それは名人の芸境と称してよいのであって、そのうえ、さらに、心のはたらきを超えた「感」を具備するようになれば、世間の名声を一身に受ける位にまで至ったことになるということが語られてあります。

その上で、以上の段階をよくきわめ、研鑽をかさねて、心の修行によって能の奥義に達するようにしなければならないという教えが説かれているところです。

**三、感想および考察と次回の予定**

① 4月の世阿弥研究会では『世阿弥能楽論集』「花鏡」の「知二習道一事」(習道を知ること)の続きから講読を行い、「上手之知レ感事」(上手の感を知ること)まで進んだ。

② 「知二習道一事」(習道を知ること)の続きでは、当今の年若な役者の芸境を比較して、段階的に順序を踏んで一つ一つしっかりと技を練習することの重要性と見まねでその場だけの演技をしていてはいけないということを理解することができた。

③ また能の略式に関しては、手に入り切った得意の能を看板の演目に定めておいてその中へ新しい能を交えていくと、古い能も新しい能も両方とも新しく感じられて、それこそが「真の花」となり目指すべきところであるということもあった。

④ 「上手之知レ 感事」(上手の感を知ること)では、上手を極め名人となっていくためにはどのようなことが必要か理解をすることができ、さらにその上のこころのはたらきを超えた境地である「感」を具備するところにまで至ると世間の名声を一身に受ける位にまで芸境を高めていくことができることも学んでくることができた。

⑤ 次回の世阿弥研究会は、5月22日(火)の18時より20時に河村能舞台の楽屋で行われる。

なお講読範囲は213頁以下の「浅深之事」(浅深のこと)からである。

参考文献 小西甚一編訳『世阿弥能楽論集』「花鏡」たちばな出版, 2004, pp.188～238.